

第 20 回：茶人らしく

教場長 田中仙融

1月の成人の日には、晴れ着姿の方を多く見かけ、嬉しくなります。

新成人の多くが朝早くから、美容院で着付けをしてもらい用意を整えるのですから、祝う前から大変な準備です。

今は何気なく自分で気付いている着物ですが、思い返してみるといつから着物を一人で着られるようになったのでしょうか。

父が指導するカルチャーセンターの生徒であったときには、父はその後二人で食事をすることの方が楽しみだったようで、洋服で参加しなさいと、母が仕立ててくれた着物をなかなか袖を通せなかったのが歯がゆかったことを思い出します。

本部の稽古を見学するようになり、着物を着用するようになりました。

帯を母に手伝ってもらいながら、着物を直してもらい、なんとか形になりました。

成人式や初詣のときに、着崩れなかったわねと褒められたことがちょっと自慢でしたが、点前をしたり、立居をすると、腰ひもが緩んで来たり、襟元が崩れたり、これならば着付けを習わなくてはと思ったこともありました。

そのようなとき、茶道の研究に寄稿していただいていた染色家の木村孝先生に着物は着慣れることが一番、着物を着るのではなく、纏うように身体になじませることが大切だという言葉いただきました。

着物の着方も年齢、職業、目的などによって一つではありません。

私たち茶を学ぶものは、着物を着て点前や給仕をしてひとさまをもてなします。その姿形を見て、心が和むものです。どうあるべきかということも茶を通して学び、目標は清楚であり、またきりっとした茶人らしい着物の着方です。是非皆さんで守って参りましょう。